

2015年全国保育実践連絡会秋の研修会（下りわき）

（2015年11月21日・22日 土日）

福島で実施された研修会ですから、原発や平和がテーマの中心となった講座の中から、**①原発被災地を訪ねて、原発についての学習** ②アフリカのルワンダの悲劇についての2つの講座から感想をまとめました。
福島を忘れない、福島をこの目で見る。そして騙されない力を持つことは、とても大切なことだと、強く実感した研修でした。

福島は今 原発事故がもたらしたもの

職員／石山路子

原発被災地視察

十一月二日朝、いわき駅前から出発したバスは常磐道を通り富岡町へ入って行った。バスが止まり「富岡駅前です」と降ろされてびっくり。駅はない、線路もない、コンクリートの土台のみ。向かいの家のお座敷にはデーンと乗用車が収まっている。町のどこを見ても人が住んでいる様子はない。死んだ町なのだこは。あの地震と津波で被災し、つづいて原発の爆発により避難したそのまま四年八か月がたっているのです。何の手当もできないまま……この惨状を目の当たりにしてみんな言葉がでなかった。

そんな人々をのせバスは楡葉町に向かう、その途中福島第二原発が見えた。悪魔の城のようにそびえていた。道は内陸に向かう。畑も田んぼも草だらけ、そして、黒い大きな包みの積み重ねられた一画。汚染土などが入っているそうだ。仮置き場だそうだが、放射性物質は漏れ出さないのか？片づける先はあるのだろうかと考えていると、バスはお寺の前で止まった。

「宝鏡寺」は山沿いに立ち裏山には墓地がならんでいた。境内は除染が済んでいますが、裏山は放射能の値が高いのであまり長い時間いないようにとの注意があった。住職は法事で出かけられ、奥さんの早川千枝子さんのお話をうかがった。奥さんは障がい者施設に勤めていたが、避難命令が出た時に二人の身寄りのない障がい者を連れ、いわき市の伊東さんの家に避難した。その時には、何も持たずご本尊と飼い犬を置いて出てしまった。九日後に両方とも避難させることが出来たが、犬は一人暮らしをさせたため、もうだれも信用せず、食べ物も受け付けず、住職の姿が見えないとパニックになるなど大変だったそうだ。また、ご本尊は無事だったが、お賽銭箱は無くなり、池の鯉も九匹のうち大きい七匹が盗まれてしまった。このお寺は鍵をかけたからまだよかったが、よその家は扉を壊され布団、地デジテレビ、子どもの貯金箱まで盗んでいった。壊された扉から動物が入り、食べ物をあさり、フンをし、家は復旧できない状況になってしまっている。

二〇一五年九月五日に避難指示が解除されたが、戻ってきた人は一割にも満たない。子供のいる家は放射能の被害を考慮して来ない、店もなく買い物ができない。自動車の運転が出来ない元気な高齢者でないと生活できない。この大谷地区は百件あったうち一二軒一人、それも夜もいるうちは半分しかなく、暗くて人のいない村は怖い気がする。元々、米や、野菜を作っていたが、孫に送ってやることもできない、しかしつくる喜びで作っている。周りの家はコメはもうつくらないと言っている。静かに語る奥さんだった。この方は鴻巣ひかり幼稚園での学習会の時に私が買った素敵な絵手紙の作者さんであった。

またいわき市にお住まいの伊東達也氏は原発反対運動について話してくれました。第二原発が建てられる頃から、原発の危険なことを学習し訴え続けてこられた人たちがいたこと、そして、その時に指摘されていたところが、今回の震災で、その通りになり、大きな事故になって行った。決して「想定外」等ではなかった事実がよくわかりました。8・11のあと、伊東さんを頼って大勢の方が身を寄せられたり、余震の度に不安になって電話をかけてくる人がいたが、何も忘れてあげられない苦しい時期があった。しかし、あれから4年以上たった今でも原発は福島県民の住むところを奪い、生活手段を奪い、生命を奪っている。県内一〇基の廃炉は福島再建の大前提ですと語られました。

この日の学習から、これからはなくてはならないことは、廃炉であり、被爆した人々の健康観察であることがよくわかりました。人間の命を守り育てる私たち保育者は、いのち・健康を脅かすものには黙ってはならないこと、自分たちが知ったことは周りに広げみんなのものにしていくことが大切だと思いました。

ルワンダから福島

子供たちを守り、平和な世の中を作る女性の力

職員／大木 美鈴



この秋の研修会で、「ルワンダ内戦」に遭遇し、3人の子どもを連れて難民キャンプから命からがら福島に逃れてきたカンベンガマリールイスさんの講演を聞きました。

私には、ルワンダの悲劇については全くといっていいほど知らず、かろうじてツツ族とツツ族の争いで大量虐殺が発生した、という程度の知識があっただけでした。しかしここで語られたマリールイスさんの体験は、日本で生きてきた私には想像することも難しいような壮絶な体験でした。

民族間の争いといわれる内戦、今迄普通に接していた隣人がいきなり殺戮者になるという信じられない出来事、多くの場合山刀でたたき切るという残酷な大量虐殺、そしてやっこの思いで脱出してからの難民キャンプでの暮らし（栄養失調、コレラ、マラリアや強姦、兵士による殺戮など）がおり、明日も生きていられるか全くわからない毎日と、その凄惨な現実の中で生きていくというこのへの想像力がとても追いつきません。

しかし紛争から復興までの苦しさや、やり場のない気持ちを深く胸に刻んできたマリールイスさんは、日本に住む私達に訴えかけました。

戦争で一番の被害者は子どもたちです。大人たちが憎しみ合い、いがみ合っている間は子どもたちの心も決して平穏にはならない。ルワンダでは内戦が終息した後、いがみ合っていた被害者ご加害者の心を繋げたのは、女性たちの子どもの思いを思いうちがたです。「子どもの未来のために加害者も被害者も関係なく一生懸命子どもの幸せを考えているのだから、今後その幸せをこわすようなことをしたら許さない」と夫たちを動かし、「許す」文化を取り戻したことが、ルワンダの大きな奇跡を生んだのではないかと言いました。

宝鏡寺のご夫婦は、このまちの行く末を見届けながら、反原発の運動をつづけていかれるのだそうだ。

穏やかなお寺の境内とお別れして、またバスに乗り、前浜の災害廃棄物集積所の黒いバッグが無数におかれた様を眺めながらいわきに戻ってきました。もう元に戻ることはできないこの町々の人々がどんな悔しい思いで暮らしておられるかを考えると、切なくてならなかった。もう元に戻ることはできないこの町々の人々がどんな悔しい思いで暮らしておられるかを考えると切なくてならなかった。

いったんこのような事故が起きれば人間の手に負えない原発は再稼働どころではなくただちに廃炉にしなくてはならないと改めて思いました。被ばくした子どもたちの健康も気になりますし、千葉・東京のことも私たちの健康も気になりました。

研修会の後の二月三日、福島県は原発事故の廃棄物処分場として富岡町が受け入れることを決定しました。千葉県、栃木県、宮城県などでは住民の反対が強く、どこも受け入れは決まっていないなか福島県が初めてです。処理施設は安全なのか、搬入の際に放射能をまき散らさないのか、富岡町はもう人が住む町にはもどれないのではないかと不安がつのります。あの気味の悪い大きな黒いバッグをいつまでも野ざらしにしてはおけないという苦渋の決断なのだと思いますが、それにつけても、まだ原発再稼働に固執している日本政府は異常です。



宝鏡寺(楮葉町)



JR 富岡駅の惨状



山積みになっている廃棄物

安齋育郎先生・伊東達也氏のお話

先生は東京大学原子力工学科の放射線防御学を学ばれ、専門家の立場から原発事故は偶発的に起きたことではなく、持ってはならなかったものであると話されました。それはいまだ、事故の起った現場を見にいけない状況にあることから話されました。何が起きたのかを見極め、廃炉までの道筋をつけなければならぬ。また避難先での放射能の被ばくはそう多くはない。避難住民が一年間にどれくらい被ばくしているのかを調べたところ、確かに福島に住んでいる人は日本の他県の人より多いが、フィンランドやスウェーデンなど、自然放射線を浴びている人よりは、はるかに少ない、そして、年々被ばく量は減ってきている。幸い食事中の放射能汚染も大丈夫なようです。しかし、放射線は浴びないにこしたことはない。避けられる必要な被ばくは出来るだけ避けた方がいい。それには除去する、遮蔽する、遠ざかる、あびる時間を短くするなどの方法があり、「より低い被ばく、より低いリスク」をめざす方がいいということでした。これからの方向が見え安心しました。

ルワンダでは毎年、4月7日からの一週間はルワンダ虐殺の追悼の週として、全国各地の施設で式典や慰霊祭が行われ、喪に服し、記憶し、反省し、学び、二度と虐殺を繰り返さないための誓いが立てられるそうです。日本が戦後七〇年、不戦を貫いたことは世界的に見ても素晴らしいことです。ですが一方で広島、長崎のことを知らない若者が沢山いる、と本当に信じられないという表情で強く語っていました。人類が初めて遭遇したこの恐ろしい原子爆弾の被害こそ、日本中で追悼し決して忘れない様にならなくてはならない事ではないのか、と。本当にその通りです。日本人の一人として恥ずかしく思いました。

そして教育を受けることの大切さ。「誰でも学校に行ける日本の教育は世界一すばらしい」とマリールイスさんは言います。二十七歳の時に青年海外協力隊現地協力員として福島文化学園で洋裁の研修を受けるためにホームステイしていた家庭で、八〇歳のおばあちゃんが新聞を読んでる姿に衝撃を受けたそうです。自分の母親は字が読めずに、手紙を出すこともできないというのに・・・彼女の活動の原点は「子どもたちの幸せのため」です。何がいかなかったのかの検証の中に「無知」があると、ルワンダに学校を作ることを目的としたNPO法人「ルワンダの教育を考える会」を立ち上げて、戦争で親を亡くしたり、貧困で生活が混乱しているルワンダの子どもたちが、教育を受けて夢に向かって進んでいけるように活動しています。世界中に支援を求めて現地ではすでに学校が建設され、運営されています。福島からも救援物資や多くの力が届いているそうです。

逆に、命の尊さ、教育の尊さ、平和の大切さを訴えるマリールイスさんの活動は、私たち日本人に、日本の教育が教育の原点を忘れてはいけないことを教えてくれているように思いました。

ここにたどり着くまでには、大きな困難や忍耐があったのでしようが、平和を一番に求める感性は生命を生み出す母親にこそ大きく備わっているものなのだ、あらためて感じ取りました。

更に福島で自らも被災し、震災で避難生活を余儀なくされた方々の心の痛みが、自分の体験を通して理解することができると、避難所を訪問して被災した人たちに、『ともにいようよ』という気持ちを込めて接しているそうです。

私にとっては、遠いアフリカの国で起こっていることや、今また世界のどこかで起こっている悲惨な出来事に対して常に心を寄せていくことはそつたやすいことではないと感じます。ですが、マリールイスさんの「私がやっていることはすべて夢や希望を実現できずに亡くなっていった人たちを供養する気持ちからです。だからこんなに大変でも喜びに感じられる。そうやって毎日を生きていきたいと思っています」という言葉は、全世界の人々の共通の思いになれるものだと思います。

